と見るべきで、この点第一貝塚とは可成り異つたものを見ることが出来た。台地西南に広がる広い冲積平野は第一貝塚成立当時の浅い干潟から第二貝塚成立期には多少の陸地化を想像することが出来、この地での農耕生活の起りが、弥生式中期に及んで行われた事等の想定が生まれる。このような見解は多少早計ではあるが、遠賀川系土器の出土をたゞちに前期と断じ得ない理由が成立するので北九州等の農耕の起源とは余程時間差のある停滞地域と解釈されることを妥当と考えるのである。尚この停滞性が下城式土器を生み、更に南九州に移り、凸帯文の最盛期を生み出す根を有するものと考え度いのである。（賀川）

第二節　下城式土器考

東九州に於ける弥生式前期の土器形式として設定された下城式土器は、大分県佐伯市下城遺跡を標準とした。[1] 而して器形は甕形を主とするものであつて之と併出する壺形土器その他に至つては必ずしも明確ではなかつた。その後、当地方の中期土器としての大津式土器設定に際して、これが下城式土器を伴うところから再び佐藤暁氏によつて検討され、甕形土器は五種類に分けられ、併せてその編年的位置付けが中期に及ぶことを注意された。[2] しかしながら、下城式土器の分類や大津遺跡の層位別に示された土器類については分類法の不明瞭な点、層位別遺物の部分的混同の疑問などが感ぜられて必ずしも全面的に首肯し難い点などがあつた。今回の白潟遺跡調査によつて我々は再びこの下城式土器を取上げてその編年上の位置、セツト関係、文化様相などを究明したいと願つたのであつた。そしてこの機会に更に九州地方に於けるこの種土器についての見通しをも考えてみることゝした。先ず、白潟遺跡に於ける整理から試みてみよう。

従来、下城式土器と称されて来た甕形土器にあつては器形上四形式に大別し、十一類に細分した。これを第一貝塚、第二貝塚、住居址（上層は乱されている部分があるので、主として下層をとる）、調査前採集品について対比すれば次表のようになる。

遺跡＼式類	1	2					3			4	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
第一貝塚	○	○	●	●	○	○	○	●	●	○	
第二貝塚			○	○				○	○		
住居址下層				●						●	
住居址上層										●	○
調査前採集品	○							○		○	○

●多量　○少量

このうち、第一貝塚と住居址下層は大体完掘に近いので最も信拠性の高いもの。第二貝塚は部分的試掘にとゞめているのでこの結果を堅持することは出来ない。大体の傾向として2式3、4類、3式8、9類、4式10類が量的にも多く、各遺跡に共通して存在していることが指摘出来る。乃ちこれらの種類が当遺跡に於ける下城式土器の最も普遍的な形態であろうと考えられる。

これらの甕形土器の範鑄に入らないものは量的には非常に少いけれども、下城式土器の位置を考えるに看過し難い資料を含んでいるので次にこれを整理する。

第一貝塚の甕形B、C、D類は形態的差異こそあれ、共に北九州前期の遠賀川式に属する資料であり、③共に一片しか見出されていない。而して第二貝塚に於けるB類は九州地方のものとしては特異な資料というべく、今にわかに系統を断定するのは躊躇される。住居址下層に於けるB類は已に指摘した如く、南九州中期の大隅式に近似していて、大隅益丸の土器④などゝ関連を有するは否定出来ない。乃ちA類甕形土器（下城式）が大部分を占めるのは各遺跡について共通しており、共伴の他の類に遠賀川式や大隅式の系列に属する資料を含んでいることは、下城式土器の文化的性格を分析するに注意すべき点であらねばならない。

次に壺形土器についてみれば、第一貝塚に於いてはその大部分を占めるのは1類乃ち北九州遠賀川系の器形と文様を有するものであった。而してこの傾向は第二貝塚でも大体認められると思われるが、特に第二貝塚にあつては他の形式が第一貝塚に比べてかなり量を増してくることが指摘される。更に肩部に於ける文様を類別した結果ではa類としたものが1類壺

形と組合さることがわかつた。しかしながらその施文具及び文様に於いて全く北九州遠賀川式の直写とみなすことは出来ず、むしろ中期以降に発達する櫛歯文の先駆的な在り方ともみられるのであつて、この地方に於ける地域的性格のあらわれと考えられる向きが強い。また器形上からみた場合、北九州に於いても遠賀川式の古い形態とみるよりも、前期後半に著しく発達した段階のそれに関係を求めねばならない。乃ち壺形土器1類は前期後半をさかのぼらせることは妥当でないと云えよう。而して、第一貝塚に於いてはこの壺形土器と下域式甕形土器が量的に最も多く出土していて、両者のセット関係が成立するのは明らかである。このことは下城式甕形土器の上限をも示している。而るに第二貝塚にあつてはこの他に別種の壺形土器が増加してくることを指摘した。乃ち2、3、4類がそれであつて、これら一群の土器は口縁部を肥厚させる手法をとり、この部分に施文することで共通するものである。而して頸部の発達と相待つて鍔状口縁の形成えと指向して中期的様相を呈してくる。これは口縁周辺に諸種の文様を附する風と共に北九州東部地域から瀬戸内沿岸地域にわたつて前期末以降特に顕著となる⑤現象と無関係に考えることは出来まい。佐伯地方が内海西南端を占めているという地理的環境におかれていることは十分これらの関係を考慮せしむるに足る。同じような動きを示すものは第一貝塚の2類にも極めて少量ながらあらわれていることは改めて注意せねばならない。特に第二貝塚4類との施文上に於ける近似は器形に於ける前者から後者えの発展系列を踏ませることを一段と有利に導くであろう。更に肩部文様の類別に於いても、1類土器とa類文様、第一貝塚2類土器、第二貝塚4類土器とb類文様、第二貝塚3類土器とd類文様の組合せを考えたのは以上の如き壺形土器の様相を説くに何ら不当を生じないであろう。また住居址下層の壺形土器1類も中期タイプの前段階の位置を占めている。而して、2類に及んでは中期の概念で処理するを妥当とすべく、前述の内海文化との関連で説明しうるけれども、他方では肩から胴部にかけて幾条かの隆起帯をめぐらす形態をとるところに日向岩戸⑥や大隅田原⑦の土器との関連が考えられるのであつて、南九州中期の大隅式土器文化との関係も強く見出されるのである。こゝに住居址下層の甕形土器B類とのセット関係を考えた根拠があつたのである。

以上のように北九州遠賀川式に系譜をたどられる壺形土器1類の他に、内海文化に於ける前期末から中期えの様相と規を一にするもの、更には南九州中期の大隅式と関連する資料などを共伴していることは、下城式土器と同時存在を考える限り、その上限は前期末に極限されねばならない。このことは、先に壺形土器1類とのセット関係から前期後半をさかのぼらないとした結果を更に一層明確に極限したかの観がある。しかしながら、第一貝塚、及び第二貝塚の遺構が斜面に立地するところから二時期以上の遺物が混在していないかという疑問も生ずるのである。或はまた下城式甕形土器自体が二時期以上にまたがつて存在するのではないか、乃ち甕形土器に新古の別があつて、これに各々新古の壺形土器が相応するのではないかという疑いもないわけではない。従つて、しばらく九州の諸地域に眼を転じて下城式甕形土器関係の資料を蒐集し、検討してみる必要がある。我々は先ず最も近い大分県下からはじめて順次他地方に及ぼしてみよう。

一、大分県佐伯市下城遺跡（第二三、二四図）

下城式土器の名称を提起するに至つた最初の遺跡で、昭和23年調査された。その概報は考古学雑誌上に賀川氏によつて報じられた。[1] その後佐藤暁氏の土器に関する考察が発表されたけれども、[2] 詳しい報文の出ないうちに佐藤氏が別府大学を去り遺物も佐藤氏の手元に行つたまゝ行方知れずの状態にあるので、賀川氏の手元に残つた図面、拓本によつてうかがうのみである。

甕形土器 には白潟第一貝塚に於けるA類とB類に相当するものがある。**A類**は下城式で 先の分類に照せば 2式3類（第二三図1）、3式8類（同図2）、3式9類（同図3—5）、4式10類（同図6）である。**B類**乃ち北九州遠賀川式の系譜に属するものは更に三種類ある（第二四図1—3）。1は口縁に刻目なく、直下に三条の沈線あるもの、2は口縁に稍荒い刻目あるもので、共に北九州方面のものとよく似ている。3は口縁のくびれ方に以上の二例と異つた特徴があり、胴部の張りから推して稍長手の甕と思われる。口縁外側に刻目その直下に四条の篦描沈線をめぐらし、更にその下に刻目を加えている。この種の器形、文様等は北九州遠賀川系の甕たるに異論

第二三図　大分県下発見下城式土器関係資料　(一)　(1/6大)

(1—6 佐伯市下城遺跡 ： 7—20 佐伯市長良貝塚 ： 21—24 大分郡由布院町並柳字山田
25 東国東郡国東町吉木たばた ： 26—28 国東町田深 ： 29 国東町安国寺字前田)

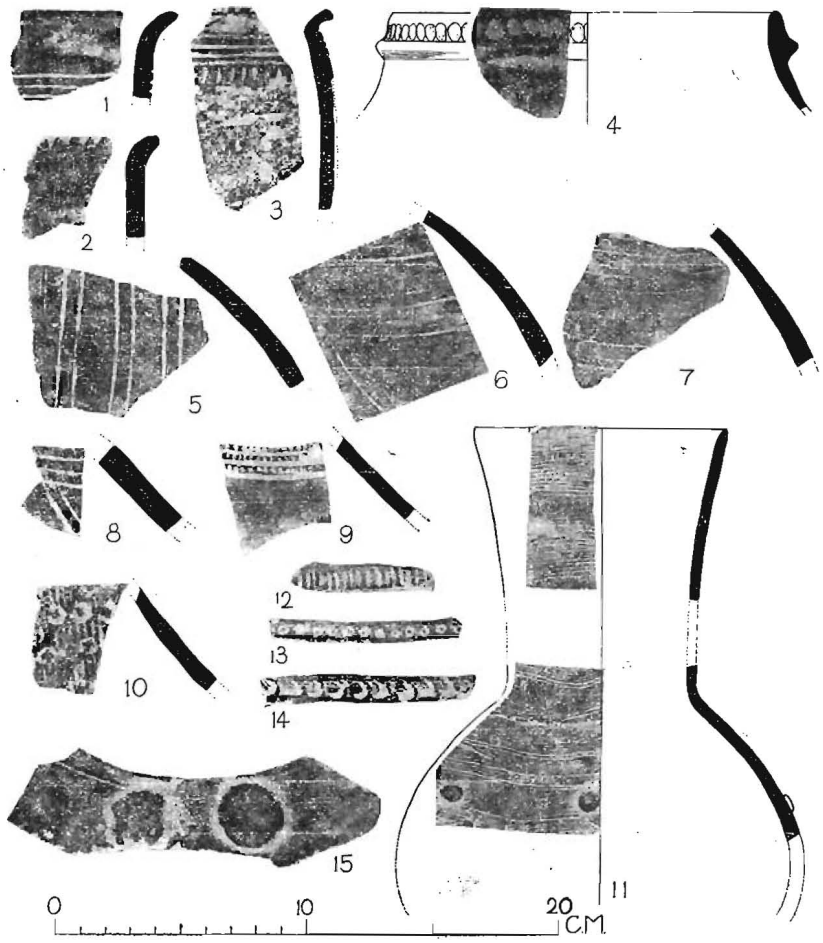
はないが、前期末に比定せられる岡山県門田遺跡の例⑧などとの関連も考慮せねばならないであろう。これは更に愛媛県片山遺跡の例⑨などえも連なつてゆく資料であろう。

壺形土器は先ず白潟第一貝塚に於ける1類乃ち遠賀川系のものがある（第二四図5—8）。この他に特に注意を引くのは11にあげた長頸壺である。口径10糎、複原高25糎前後となるこの壺は、数本の櫛歯からなる施文具で口縁から肩部にかけて施文し、胴部に円形浮文を数個貼付けたものである。一見して幾内唐古遺跡⑩の第二様式や宮滝遺跡⑩などとの関連性を考えせしめる資料たるは明白であろう。乃ち、杉原氏が桑津Ⅱ式⑫と称された幾内中期土器との関連に於いて考えられねばならない。9、10は竹管文を使用せる壺の肩部と思われる。12～14は口縁外側の文様で、12は刻目文、13は竹管文、14は半截竹管文をめぐらしている。この種文様は北九州前期後半から中期にわたつてみられるのみならず、宮崎県から山口県方面にもその分布は広い。これらの資料はいずれも口頸部が発達して口縁内面が平たく肥厚し、或は鍬形口縁をなす点で共通している。15は上面平な鍬形口縁に二個宛の円形浮文を配したもので、北九州中期の須玖式に属する。ところで4に示した資料は無頸壺の一種と思われ、貝殻様の施文具で口縁外側を押えた手法がみられる特殊なものであるが、現物を見ることが出来ないので十分使用するに足りない。

二、大分県佐伯市長良貝塚（第二三、二五図）

これも昭和23年に下城遺跡と合せて調査されたが、当時の資料は佐藤暁氏の手元に行つたまゝである。幸い賀川氏が九州大学考古学資料室に寄贈された資料数点が残つている（第二三図7—10）。白潟遺跡第二次調査の際に我々はこの遺跡を訪れて調査を試みた結果少数の資料を採集出来たが（第二三図13—20）、更に附近の民家に採集された資料をもこゝに合せて収録する（第二三図11・12及第二五図1）。

この貝塚は下城遺跡の南に相対する極めて近い丘陵の突端に形成されたもので、ハマグリ、カキを主体とする広範な貝塚である貝層は平均深さ1.5米に及び、全く土砂を交えぬ純貝層で、猪の顎骨や鹿角を出し、これら骨角は一部火中した形跡がみえる。土器



第二四図　大分県下発見下城式土器関係資料　（二）（½大）

―佐伯市下城遺跡―

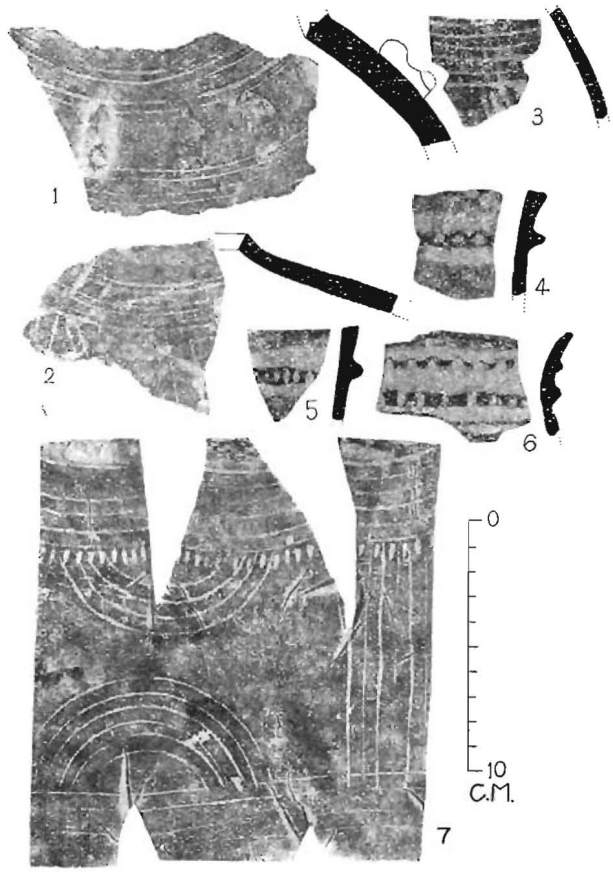
の包含量は比較的少い。

甕形土器 下城式の好資料が多い。その種類は3式8類(第二三図7・11)、9類(同図13・8)、4式10類(同図14・9)、11類(同図15)である。更に器形上4式に属して2式6類と同様な袈裟襷状の隆起帯をめぐらす新例がある(同図10)。之を4式12類として分離しよう。これらの甕に属する底部として17、18がある。これらの土器はいずれも褐色で砂利を適度に含むものである。

この他に16に示した薄手で研磨された黒褐色のものがある。これは口縁が鋭く屈曲して内面に稜をつくり、これから口唇まで平面をなす。前期末をのぼらせることは無理であろう。上面に煤が附着している。

20は甕の胴部で三角形の隆起帯を二条めぐらしたもの。赤褐色の固い焼きで、研磨されている。胎土に石英砂を含む。須玖式甕に類似せる資料である。

壺形土器 には第二五図1に示した例がある。その器形は白浦第一貝塚の1類と同じものであろう。肩部に中凹みの貼付文をめぐらし、その上下に二本歯構成の櫛歯様施文



第二五図　大分県下発見下城式土器関係資料（三）（1/4大）
（1 佐伯市長良貝塚：2豊後高田市戸原台：3—6 大分郡結城ノ台：7 坂ノ市町久原）

具で四条の沈線文を配する。乃ち彼の1類土器に貼付文が組合つたものである。

鉢形土器　として第二三図12をあげておく。上げ底が発達して脚付きとなつたもので、白潟住居址下層の脚形土器との関連に於いて注目される。

この遺跡に於けるセット関係は白潟遺跡第一貝塚に近似している点で重視すべきであろう。

三、大分県大分郡由布院町並柳字山田（第二三図21—24）

この遺跡の性質については未だ不明であるが賀川氏の調査になる四例の甕と底部をあげておく。21は下城式3式8類に属する。22は下城式4式より派生したものと考えられる。胴部に段を設け、それより下方に刷毛目を加え、口縁下の外反する部分に三角形隆起帯をめぐらしているが、その手法には中期的様相がうかゞわれる。これは次に述べる東国東郡国東町田深の例を介在させることによつて、その変遷過程を或る程度埋めることが出来よう。底部が二点あるが、特に24には白潟第一貝塚出土の例（第一一図13）との関連が示唆される。

四、大分県東国東郡国東町吉木たばた（第二三図25）

乙益重隆氏の資料によれば、下城式甕形3式7類に相当する資料がある。伴出物不明。

五、大分県東国東郡国東町田深（第二三図26—28）

これも乙益重隆氏の資料に拠つた。下城系統の三個の甕形を呈示しておく。26は3式に属するものながら刻目が口縁部にみられ、隆起帯にはみられない類で、7類と8類の間を埋めるであろう。今一応7類に含めておく。27、28は共に4式に出る類であろうか。

共に胴部に段を有する特徴がある。27は前述22とは逆に段より上部に刷毛目がみられる。28は北九州遠賀川流域にも類似した資料があるので、下城式として分離するに稍疑点が残る。

六、大分県東国東郡国東町安国寺字前田（第二三図29）

こゝに掲げる資料は安国寺遺跡⑬の第六区溝底より出土した資料で4式10類に属する。更に、近く公刊の本遺跡調査報告書には3式8類に属する資料があることも附言しておく。

七、大分県豊後高田市戸原台（第二五図2）

賀川氏の採集資料中に小破片ながら下城式甕形がある。今、形式類別のみをあげれば、3式8類、4式10類である。共伴の壺形土器一片（第二五図2）は口縁から肩部に及ぶ無頸壺である。而してその文様は白潟第一貝塚1類にみられたb類（第二図）に類似する。他に中期に属すると思われるコ字形隆起帯ある破片もあつて、壺の器形と考え合せてみても中期に下る時期の所産と思われる。

八、大分県大分郡大分村結城ノ台（第二五図3—6）

賀川氏の調査資料である。壺形の破片（第二五図3）は白潟第一貝塚1類のa類文様（第一〇図）を有する。甕形は下城式で、3式9類、（5）4式10類（4・6）である。

九、大分県北海部郡坂ノ市町久原（第二五図7）

この遺跡の詳細については明らかでないが、口縁部を欠ぐ凡完形の遠賀川系壺が出土している。大分大学に蔵するもので、胴部

が著しく張り出している。⑭ 肩部の文様は賀川氏の拓影によれば、白潟遺跡第一貝塚の壺形1類に多いa類文様に類似する。只、この例は上下の重孤文を斜めに相対させずに上下に配する点白潟遺跡の例とは異る。また、これは頸部近くに配された平行線文の下に刻目文を並べるのも稍異り、先の下城遺跡の遠賀川系甕(第二四図3)との関連が考えられなくもない。この資料は前章でa類文様の復原を考えるに多大の参考となつた。共伴の甕形を知りえないが下城式甕形との関連は考慮しておかねばなるまい。

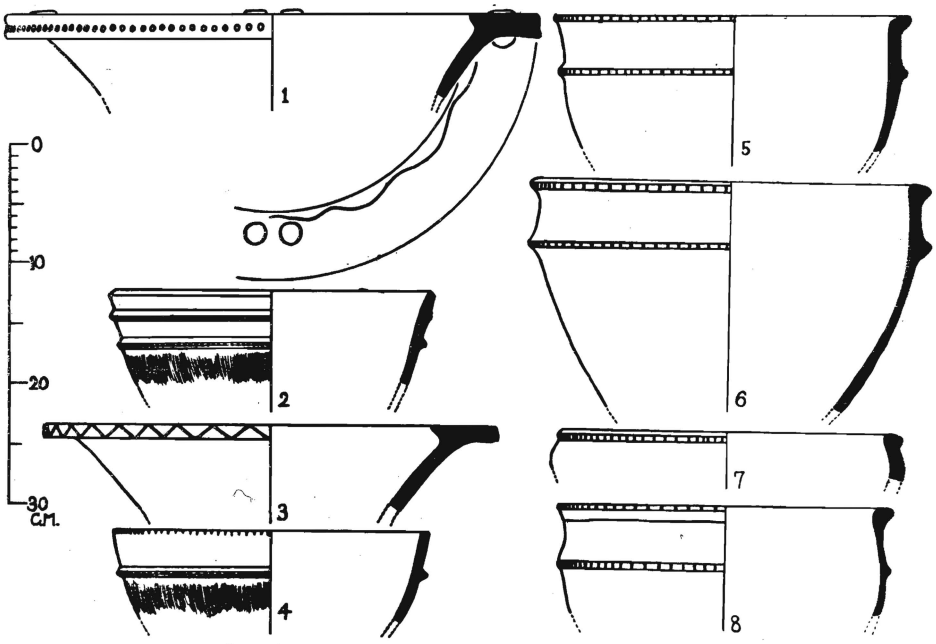
一〇、大分県北海部郡坂ノ市町一木遺跡 (B地点)

この遺跡は昭和27年10月県営伝習農場の開墾に際して発見され、大分大学歴史学研究会が調査した。遺跡は大形の円形竪穴住居址であつたという。出土遺物については佐藤暁氏の紹介がある。② それによれば、甕形は下城式3式8類及び9類である。その他に北九州遠賀川式と須玖式が共伴したという。壺形には外反する口縁内面が平たく肥厚してそこに粘土紐の貼付文あり、外側に篦描鋸歯文をめぐらすもので、白潟住居址下層2類(第一五図3)の前段階におかるべきであろう。他の一類は口縁鍬形をなし、上面に二個宛の円形浮文を配し、外側に篦描鋸歯文をめぐらす類で、白潟第二貝塚4類(第一四図5)、同住居址下層2類(第一五図3)、下城遺跡の一例(第二四図15)更には後述宮崎県の例(第二六図1・3)などと同列に置かるべきものである。

一一、大分県速見郡藤原村大津字下野遺跡

この遺跡は三層から成る遺物包含層で、由布鶴見の火山噴出によつて二層の火山噴出物の層が存在したゝめに層位が明瞭であつたといわれる。これも佐藤暁氏の紹介②によつてうかがうことにする。下城式土器を含むのはこのうち下、中層で、上層は後期前半に属するようである。

先ず下層の下城式甕は3式8類、9類である。他に遠賀川式がある。共伴の壺形には口縁部外反し、頸部と肩部に一、二条の隆



第二六図　南九州発見下城式土器参考資料（1/6大）
1•2:宮崎県•上屋敷　3•4:宮崎県•牛牧　5•6:鹿児島県•東昌寺　7•8:鹿児島県•伊敷

起帯をめぐらして腹径大きく、器高と迫中しているもの。胴の張りよりも器高大きく、稍長頸的傾向があつて、頸、肩に数条の平行沈線文あるもの。外反せる口縁内面を肥厚させて（或はこれに貝描鋸歯文を加え）、外側に篦描鋸歯文をめぐらすもの。外反せる口縁が上面平に鍬形をなし、須玖式の範鋳に入るものなどがある。而して前二者を古く、後二者を新しく位置ずけるに異論はなかろう。最後の類は前述一木遺跡の後類と同列におかるべきもので、前三者は福岡県八幡市高槻遺跡や、遠賀川流域、山口県下関市周辺の黒井、伊倉、綾羅木遺跡⑤等の遺物にも徴しうる。

中層の甕形下城式は3式8類、9類及び2式6類がある。この他に中期の須玖式に属する鍬形口縁のものがある。壺形は一木遺跡の後類や本遺跡下層の須玖系のものを主とする。口縁上面に円形浮文を配し、外側に篦描鋸歯文や竹管文をめぐらすもので、一木遺跡の項で引合いに出した諸例と相通ずる特徴を示している。

一二、宮崎県宮崎郡生目村浮田字上屋敷（第二六図 1・2）

下城式甕4式10類が佐藤暁氏によって紹介されている。[2] 共伴の壺形は上面平らな鍬形口縁をなし、上面に二個宛の円形浮文、外側に竹管文を有するもので、この類は前述したように類例が多い。遺跡については知りえない。

一三、宮崎県児湯郡高鍋町牛牧（第二六図 3・4）

これも佐藤氏の報文[2]に拠る。佐藤氏の実測図に稍疑点あるが、下城式甕は3式8類に属するかと思われる。共伴の壺は前掲上屋敷の例と同じ器形で、鍬形口縁の外側に篦描鋸歯文を加えたものである。遺跡については不明。

一四、宮崎県高千穂町三田井高千穂高校々庭

乙益重隆氏の御教示による。同校庭西南隅出土という。これは4式12類に属する。大分県長良貝塚の類例（第二三図10）と稍異なり隆起帯が多い。詳細は乙益氏がいずれ公表される筈である。

一五、熊本県熊本市御幸町加勢川河底

最近乙益重隆氏が公表された資料[15]で、甕は下城式の2式6類の範疇に入るべきもの。発見の場所の性質上、壺形土器とのセット関係は明らかでない。同所採集の壺に遠賀川式の比較的古式タイプの要素をもつものがあるけれども、この種甕がそれ程古く位置ずけるに耐えないことはこれまで述べて来た諸遺跡の例から推して明白であろう。むしろ時期の異るものと考えてよかろう。

以上あげた諸例は下城式土器乃至その共伴資料を出土せる遺跡であるが、なお、他にも関連資料がないでもない。これらは厳密

な意味で下城式土器の範鋳に含めるには、筆者自身未だ実物を見ていないので決定しかねるけれども、注目してよい資料と考えられるので以下に掲げておこう。

一六、鹿児島県上伊院村直木字東昌寺（第二六図 5・6）

本例は当地の考古学会紀要に報じられたものである。[16] 直口に近い口縁部は外側に肥厚してこれに刻目が加えられ、その下方にも刻目ある隆起帯をめぐらした甕形である。共伴資料に遠賀川系の壺があるという。

一七、鹿児島県鹿児島市伊敷旧練兵場（第二六図 7・8）

これも当地の考古学会紀要所載の例である。[17] 甕形は前掲東昌寺のものと類似する。共伴資料に外湾刃二孔の石庖丁がある。

これらの例はその共伴資料による限り、前期に比定される可能性が大きい。而して、これらの資料は同県内の鹿児島市郡元町一の宮遺跡下層土器[18]や、大隅地方に多い所謂大隅式土器[19]に展開してゆくであろうと考えられる。

以上みて来た如く、下城式関係資料は大分県の周防灘に亟した地域全般に濃密な分布を示し、南九州の地に及んでいる。各遺跡発見の下城式甕形土器及びその共伴資料について比較対照すべく、これを表示すれば次の如くである。

	遺跡	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	下城式以外の甕形	共伴の壺形土器	その他の伴出土器
1	大分県佐伯市下城			○					○	○	○			遠賀川系	白潟1類、玖系、桑津Ⅱ系、須	
2	〃 佐伯市長良								○	○	○	○	○	「字口縁、須玖系	白潟1類、亜式（貼付文）	脚付鉢形
3	〃 由布院町並柳								○					下城4式亜系	底部のめ（形式不詳）	

4	〃 国東町たばた													
5	〃 国東町田深													
6	〃 国東町安国寺													
7	〃 豊後高田市戸原台													
8	〃 大分郡結城ノ台													
9	〃 坂ノ市町久原													
10	〃 坂ノ市町一木													
11	〃 速見郡大津下層													
11	〃 〃 中層													
12	宮崎県宮崎郡上屋敷													
13	〃 児湯郡牛牧													
14	〃 高千穂町三田井													
15	熊本県御幸町加勢川													

4	○													
5	(○)													
6		○												
7			○											
8				○										
9					○									
10						○								
11							○							
11							○							
12								○						
13									(○)					
14										○				
15											○			

4														
5	下城4式亜系?													
6														
7														
8														
9														
10	遠賀川系、須玖系													
11	遠賀川系													
11	須玖系													
12														
13														
14														
15														

4														
5														
6														
7	白潟1類系無頸壺													
8	白潟1類													
9	白潟1類系													
10	遠賀川系、須玖系													
11	遠賀川系、須玖系													
11	須玖系													
12	須玖系													
13	須玖系													
14														
15														

この表から考えられることは、8、9、10類が最も広い分布を持つておる普遍的形態であり、大分県内では大体に於いて白潟遺

跡に於ける壺形1類を共伴し、これに北九州中期の須玖式土器の特徴を備えたものが加わる状態にある。特に大分県大津遺跡の下層が遠賀川系の壺形、甕形を主体とし、若干の須玖系壺形を伴出するに対して、中層では遠賀川系を含まず、壺形、甕形共に須玖系となることは、両層に於ける下城式が8、9類から成り、中層では6類が加わることゝ合せ考えて注意されよう。又、豊後高田市戸原台、大分郡結城ノ台が下城式8、9、10類を出し、伴出資料に白潟1類の壺をもち、須玖系土器を含まないことゝも同じ結果をうる。更に、佐伯市下城及び同市長良では8、9類の他に10、11、12類を有するが、こゝでは伴出資料に白潟1類壺形の他に須玖系の甕又は壺、畿内桑津Ⅱ系の壺等があつて、大津遺跡中層と同じ結果をうる。同様のことは宮崎県宮崎郡上屋敷の場合にも云える。同県児湯郡牛牧の下城式甕には佐藤氏の実測図に疑点あつて、4式ではないかとも考えられるので、同様の結果に決着する可能性が生れてくる。

このようにみてくると、8、9類には中期以前から行われていた形跡がうかゞわれ、これに6類や10類が加わる時期から中期タイプの甕、壺類が行われていることがわかり、その時期まで、白潟遺跡1類の壺形も引続き行われていることを認めねばなるまい。而して、これらの変遷は短い期間の現象であつたと考えられる。かくして、下城式甕形土器の行われた時期には三つの段階が想定されてくるであろう。

(1) 主として遠賀川系土器とのみ共存の時期（下城式第一期）

(2) 遠賀川系土器と須玖系土器、更には畿内系統壺形が加わる時期（下城式第二期）

(3) 遠賀川系土器がなくなり、全く中期土器ばかりの時期（下城式第三期）

而して(2)と(3)の時期は一地方での時間的変遷もさることながら、地域的変遷も考慮せねばならない。乃ち、白潟遺跡に於ける1類壺形は遠賀川式に系統を引くものであるけれども、かなり地方的変化を遂げていることは前章で述べたところである。而して、この種土器が大分県以外の地で下城式甕形を出す遺跡に見出されていないことは、東九州の地方色としてこの土器を処理するに支

障を来さないであろう。またこのことは、下城式土器に於いても、より古い時期のものが東九州のみにあることを意味している。換言すれば、下城式土器の出現地域が東九州にあつたことを知るのである。南九州発見の下城式土器がより後出的なものであることは、東九州からのこの種土器文化の伝播として扱われる可能性を一層大きくしている。

ところで、以上の如く解するならば、鹿児島県東昌寺及び伊敷の下城式類似の甕形資料の説明が要求されてくる。これについては現在のところ筆者は極めて概略的な予察しかなしえないが、一案として提示しておこう。それはこれらが、大隅式土器え展開してゆくものとみる限り、これら資料の位置付けは少く共大隅式と同列乃至はそれ以前におかねばならない。而して、伴出資料として遠賀川系壺形土器や外湾刃石庖丁を出土しておることは、前期に位置ずける公算をより多くもつている。従つて、これは東九州の下城式から展開するとみるには地域的にまた時期的に無理がある。それで、これらの資料は下城式と一応切離して南九州に於いて大隅式の成立過程に関する資料として処理すべきであろうと考える次第である。他に良い腹案も持合さないので、識者の御教示を仰ぎたいものである。

このような結果に白潟遺跡の結果を照合してその位置ずけをすることが最後に残されて来た。本論考のはじめに整理を試みた白潟遺跡の結果をこゝに改めて検討することゝしよう。

先にも指摘した如く、白潟遺跡に於ける下城式甕形土器は3、4、8、9、10類が主体をなしていた。これを各遺跡別に前表に準じてその伴出遺物とのセット関係を表示してみれば次のようになる。

大分県佐伯市鶴望字白潟			第一貝塚	下城式以外の甕形	共伴の壺形土器	その他の伴出土器
1	1		○	遠賀川系	1類	脚付土器、脚形、異形土器
2	2		○			
	3		●			
	4		●			
	5		○			
	6		○			
3	7		○			
	8		●			
	9		●			
4	10		○			
	11					
	12					

第二貝塚			○	○			○	○		須玖系	1類、須玖系	鉢形、脚形
住居址下層				●					●	須玖系、大隅系	須玖系、大隅系	脚付土器、須玖系鉢形、蓋形

すでにその共伴関係から下城式土器の上限を前期末よりさかのぼりえないことを推論し、伴出の須玖系のものや透孔ある脚形土器に於いては瀬戸内方面との接触も示唆される要素が含まれていること、更に南九州大隅式との共存関係があることなどを指摘しておいたが、これを右の表にみる如く細かく検討すれば第一貝塚では下城式甕形は3、4、8、9類を主体として、少量の遠賀川系甕形と大量の1類壺形を伴う。第二貝塚では部分的試掘であるため十分信拠するに足る程の資料が出盡していない憾みがあるけれども、3、4、8、9類甕形に須玖系の壺、甕が稍多く伴い、1類壺形が減少する。而して、住居址下層の場合と考え合せれば甕形10類の存在も考慮しておかねばならない。住居址下層では4、10類甕形に須玖系及び大隅系の壺、甕を伴つている。乃ち、白潟遺跡に於いても先の三つの時期を考えることは可能である。三者の前後関係は第一貝塚、第二貝塚、住居址の順に配置されるべく、また三者は各々相重なる時期をもつていると考えねばならない。従つて、三者の時期差は極めて短い間のものと云える。それ故簡単に云えば、第一貝塚を第一の時期、第二貝塚を第二の時期、住居址下層を第三の時期により多く比重がかゝつているといえるのである。これは又下城式甕形各類の共存関係にあつても大体先に出した結果と照合されてくる。

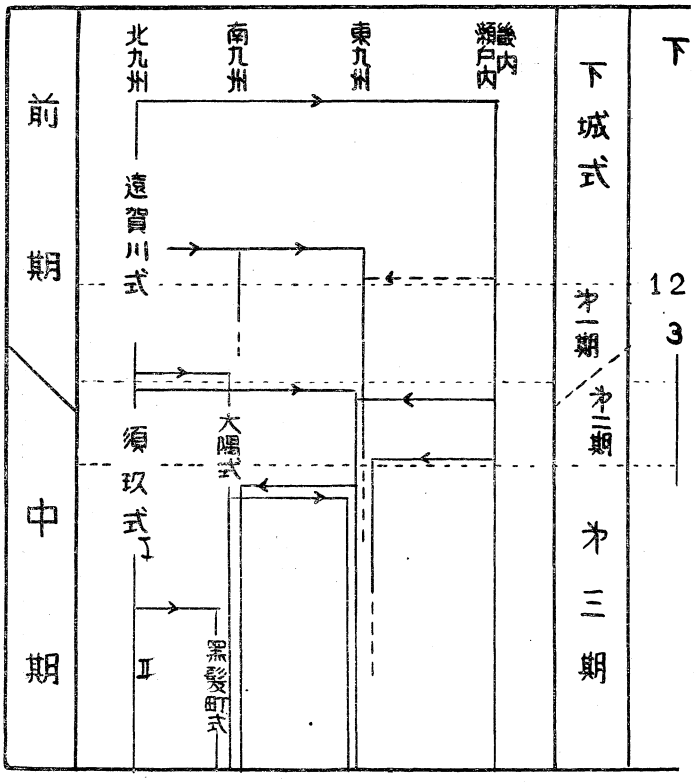
かようにみてくると、大体第二の時期に須玖系及び畿内、瀬戸内方面からの影響をうけ、稍遅れて南九州大隅系の北上が到達したと考えられる。また第一の時期には遠賀川系の壺形の伝播と共に遠賀川系甕形もみられるから、当初この地に伝播した際には遠賀川系壺形、甕形はセットの状態で入つて来ていることが考えられる。而して壺形は下城式甕形とセットを組み変えられてゆくのに平行して地域的変改を加えられ、白潟遺跡1類が形成されたとみられよう。そしてこれこそこの地方の下城式第一期に於ける代表的壺形であつたのである。こゝに我々はこの1類をもつて下城式甕形に対する下城式壺形の名称を与えようとするものである。

遠賀川系甕形は変改を加えられることなく取残されて早く消滅し、下城式壺形も第二期に入ると須玖系にその地位を譲るに至つた。これは前期から中期えの文化転換を意味する劃期的現象であつた。我々はこの時期以降を弥生式文化中期に比定するものである。そして、第三期に入ると第二期に新しく登場した須玖系が完全に遠賀川系を駆逐して全盛を誇り、大隅式が加わつてくるのである。この意味で、第二期は中期えの転換途上としての位置付けがなされよう。

土器	遺跡		
甕形式	下城式関係		
	大分県	白潟ヵ一貝塚	4
		白潟ヵ二貝塚	
		白潟住居跡下層	
		佐伯市下城	5
		佐伯市長良	
		由布院町並柳	6
		国東町たばた、田深、安国寺	7
		豊後高田市戸原台	8
		大分郡鶴城ノ台	9
		坂ノ市町久原	10
		坂ノ市町一本	11
		速見郡大津下層	12
		速見郡大津中層	
	宮崎県	宮崎郡上屋敷	
		児湯郡牛牧	
	熊本県	高千穂町三田井	
		御幸町加勢川	

更に、壺形の盛衰に対して下城式甕形が第二期、第三期まで少しの変化はあつても引続いて行われている現象。また第一期に於ける遠賀川系壺形が下城式壺形に型変りしても、遠賀川系甕形のみは変化を加えらなかつた現象は、甕形が元来日常生活必須の煮沸容器であつたことに根ざしていると考えられる。それは文化の転換が直ちに生活の転換を意味するものでないことを物語つているのである。生活面に於ける因習が容易に脱化しえないことは現代の我々の生活にあつてさえ日常茶飯時のことであるのに徴しても首肯されうるであろう。

以上の所論を要約すれば上の如き表が出来るであろう。



次に、下城式土器の下限はどうであろうか。その手掛りになるのは大分県速見郡大津上層遺跡である。先にも述べた如く、上層は後期初頭に比定される。こゝでは下城式土器を出してないが、白潟遺跡下層に出土した須玖系統の小形長頸壺と同様の資料をみる(②第一五図5)。これは中期後半に現われ、後期初頭まで及ぶのでこれによつて下城式土器の下限が確実に中期後半に及んでいることが知られる。しかし、その下限を更に明確にするのは今後の精査に残された課題である。もう一つの課題は、東九州に於ける下城式土器の上限が前期末をさかのぼりえないとすれば、この地方の前期の資料は未だ空白のまゝとなつて、今後この方面にも調査の手を延ばさねばならない。その意味で、白潟第一貝塚に於ける下城式甕形1、2類が何らかの手掛りを与えてくれるのではないかと思われる。この資料は他の下城式関係の遺跡にみられず、土器自体稍古い様相をもつていると考えられるので、下城式第一期以前乃ち下城式甕形出現以前に関連をもつ資料ではなかろうかと考える。下城式以前の文化様相を明らかにすることは、前期の空白を埋めるのみならず、下城式土器形成の過程をも知る鍵を秘めておるに違いないと思うのである。

さて、下城式土器に関する以上の如き考察と合せて一考しておくべきは白潟遺跡に於ける石器との関係である。第一貝塚は凡そ完掘に近いにもかゝわらず、一片の石器も、更には製作したと思われる石屑すら見出せなかつた。而して第二貝塚と住居址では磨製石鏃、砥石、石庖丁等を少数ながら出土している。またこれと呼応するかの如く第一貝塚ではわずかに二片の獣骨を見出したに対して、第二貝塚ではかなりの獣魚骨を発見した。このことは下城式第一期は採集経済を狩猟、漁撈に殆んど頼らず、貝類のみに依存したことを意味するのではないだろうか。古来、周防灘に面したこの地域は貝産の豊富なところとして知られており、ごく短期間ならばそれのみでも生活しうることは可能であろう。さすれば、下城式第一期と第二期の土器文化に示現された相違は、このような経済生活面に於ける相違をも示唆していたと考えられる。しかしながらこのような現象が白潟遺跡だけの特殊性であつたか或はかなりの普遍性を認めうるかは今後諸遺跡について検討を加えてから決せられねばならない、今後の更に新しい課題の一つである。（小田）

註

① 賀川光夫「東九州に於ける押型文土器と弥生式土器」（考古学雑誌37―1）昭和26年

② 賀川光夫・佐藤暁「東九州弥生式中期土器の一形式―主として大津式について―」（別府女子大学紀要第四・五輯）昭和29年

③ 東京考古学会「弥生式土器聚成図録」3参照　昭和13年

④ 「弥生式土器聚成図録」13のH41

⑤ 小林行雄「弥生式土器聚成図録解説」昭和14年

小田富士雄「長門下関周辺の弥生式土器―長府博物館蔵品整理報告―」昭和32年

⑥ 「弥生式土器聚成図録」10のH1及びH4

⑦ 「弥生式土器聚成図録」10のH5及びH6

⑧ 鎌木義昌「中国」（日本考古学講座4所収）昭和30年

⑨ 杉原荘介「伊予阿方遺跡・片山遺跡調査概報」（考古学集刊第二冊所収）昭和24年

⑩ 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」（京都大学考古学研究報告第十六冊）昭和18年
⑪ 末永雅雄「宮滝の遺跡」（奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告第十五冊）昭和十九年
⑫ 杉原荘介「弥生文化」（日本考古学講座4所収）
⑬ この遺跡については近く九州文化総合研究所より報告書が出版されるのでそれに拠られたい。なほ中間報告として次の書がある。
九州文化総合研究所「安国寺弥生式遺跡調査概報」（西日本史学7号）昭和26年
⑭ 半田康夫・富来隆「郷土大分県の歴史(1)」13頁所載写真　昭和32年
⑮ 乙益重隆「南九州」（日本考古学講座4所収）
⑯ 川上四郎「東昌寺遺跡発掘報告」（鹿児島県考古学会紀要第2号所収）昭和27年
⑰ 麻生孝行「有溝の石庖丁」（鹿児島県考古学会紀要第2号所収）
⑱ 河口貞徳「一の宮遺跡」（鹿児島県文化財調査報告書第一輯所収）昭和29年
同　「鹿児島県鹿児島市一の宮遺跡」（日本考古学年報2所収）昭和29年
⑲ 寺師見国「南九州の弥生式土器」（考古学雑誌36ノ1所収）昭和24年

第三節　大分県の火葬墓

―蔵骨器の変遷とその歴史的意義―

火葬墓は文献の伝うるところでは文武天皇四年（西歴七〇〇年）の僧道照の死に始まる。

三月己未。（十）道照和尚物化……弟子等奉二遺教一火二葬於粟原一。天下火葬従レ此而始也。（続日本紀巻一）